ロマン派精神医学の一側面

――ユスティヌス・ケルナー生誕二〇〇年にちなんで――

濱中淑彦

一八世紀末から一九世紀初頭の主にドイツ語圏において J. Brown（一七三六～一七八八）の興奮学説、A. Mesmer（一七三四～一八一五）の動物磁気説、F.W. Schelling（一七七五～一八五四）の自然哲学などを背景として成立したロマン派医学の歴史的評価は、従来毀誉褒貶相半ばするものであった。殊に、ロマン派医学の没落後に勃興した自然科学的客観主義の優位が益々明確になった今世紀前半においては、W. Leibbrand（一九三七）、P. Lain-Entralgo（一九四三）などに見る如き積極的評価への試みがなかった訳ではないにしても、「医学のロマン主義者達は、自律の欠如のために失敗に終わった」という F.H. Garrison（一九三一）の結論に一例をみるような否定的評価が支配的であったと言わざるを得ない。しかしながら他方では、既に今世紀初頭に遡る医学的人間学と精神分析学の考想が、第二次大戦後に至って漸く医学者の心を捉え、自然科学主義、客観主義への反省がはじまると共に、ロマン派医学を単に後代の客観的科学主義の視点から一方的に断罪するのではなくて、病める人間の主体的側面にそれなりに注意を促したものとして再評価しようとする試みが、各方面で目につくようになっており、巨大科学とバイオテクノロジーが一段と勢いを得つつある現代においても、逆にむしろそれが故に、この流れは脈々と生き続けていると言えよう。この流れは、㈠詩人とは「先験的医師」と述べた

Novalis (F. v. Hardenberg: 一七七二～一八〇一)、「医師」F.W.v. Schelling (一七七五～一八五四)、いわゆる「精神論者 Psychiker」の J. C. H. Heinroth (一七七三～一八三四)、「身体論者 Somatiker」の F. Nasse (一七七八～一八五一) などを、主として人間学の視点より再解釈しようとする H. Schipperges (一九五九～八五)、O. M. Marx (一九六五)、H. G. Schomerus (一九六六)、M. Schrenk (一九六八)、J. Neubauer (一九六九～七一)、G. B. Risse (一九七二～一九七六)、H. Sohni (一九七三) などと、(二)「無意識」論をはじめ精神分析学、精神療法、力動的精神医学が成立する過程でロマン派医学、特に Schelling などのほか G. H. Schubert (一七八〇～一八六〇)、J. Kerner(一七八六～一八六二)、C. G. Carus (一七八九～一八六九) などが果たした役割を評価しようとする W. Kretschmer (一九五四～六六)、I. Gladson (一九五六)、H. Ellenberger (一九五七～七二)、E. Harms (一九五七～六五)、H. Ey (一九六七)、H. Schott (一九八一～八六) といった研究者によって代表されるであろう。またロマン派医学の問題は、学際的規模(R. Brinkmann 一九七八など) や精神史的視点 (G. Gusdorf 一九七六～一九八四など) からも全面的に再検討されつつあり、例えば G. H. Schubert の生誕二〇〇年記念シンポジウム (一九八〇) などには、フランス語圏、英語圏の研究者も参加していることも注目される。

所で、一九八六年は上に挙げたロマン派の諸家のうち、スピリティズムへの関心を示した文人・医師として特異な位置を占める Justinus Kerner の生誕二〇〇年にあたるので、彼の活動の場であったドイツ・シュワーベン地方の小邑 Weinsberg において、記念シンポジウム「医学とロマン主義：心の探究者と医師としてのケルナー Medizin und Romantik ——J. Kerner : Seelenforscher und Arzt」(一一／一三、九、一九八六：Freiburg 大学医史学教室・Weinsberg 市・Kerner 協会主催) が催され、筆者も出席して発表する機会を与えられたので、ロマン派精神医学において彼が果たした役割などについて、若干述べてみたい。

ユスティヌス・アンドレアス・クリスツィアン・ケルナー Justinus Andreas Christian Kerner は、ウーラント L.

Uhland などと同じく西南ドイツ・シュワーベン地方出身の後期ロマン派に属する文人であり、同じロマン派ではあるが国際人のハイネ H. Heine によって「偉大なる愚人であるが、最高の将軍ではない」（一八三九）と皮肉られている通り、その作風がビーダーマイヤー的な「シュワーベン派ロマン主義」と評価するむきもあって、決して世界、否ドイツ国内においてすら、万人によって無条件に賞賛の的となった大詩人とは言い難いが、メランコリーとユーモアに溢れて情感と郷土色に富み、民衆にとって親しみ易い作品の幾つかは、今日なお "minor classics"（Ellenberger 一九七〇）として愛唱されている。晩年の「最後の花束 Der letzte Blütenstrauß」にいたる数多くの詩の中では、シューマン R. Schumann (op. 三五）によって作曲された「憧れ Die Sehnsucht」などが佳作として広く親しまれており、散文ではテュービンゲン大学卒業後の遍歴旅行に着想を得た処女作「旅の影 Die Reiseschatten」（一八一一）が「このうえなく純粋、健康な詩魂の永遠にみずみずしい泉」（友人の神学者 D.F. Strauß 一八三九）として最高の作品と評価され、自伝「私の少年時代の絵本 Das Bilderbuch aus meiner Knabenzeit」（一八四〇）もケルナーらしい楽しい読みものとなっている。

医家としてのケルナーはボツリヌス中毒に関する重要な研究（一八二〇～二二）などによっても高く評価されているが、精神医学、心理学との関わりは殊に深い。㈠興味深いのは、ケルナー自身が一二歳の頃、神経性胃腸障害（"eine außerordentliche Reizbarkeit der Nerve meines Magens"）を来して様々な治療を受けたが軽快せず、当時の著名な動物磁気（後の催眠術）治療家グメリン E. Gmelin（一七五一～一八〇四）の加療を受けて初めて回復したことであって、この点は病跡学の視点より考察の対象になりうるであろう。㈡またこのことは、後に彼が同じシュワーベン地方出身のメスマー F.A. Mesmer（一七三四～一八一五）の動物磁気説 magnetisme animal に関心を抱いて自らもこの療法を実践するようになった一つの契機であるとも考えられ、晩年（一八五五）にはボーデンゼー湖畔のメールスブルグ Meersburg にメスマーの旧居を訪ねてその伝記（一八五六）を著すことになった。㈢テュービンゲン大学に在学中（一八〇六）には、既に発病していた精神病の大詩人ヘルダーリン F. Hölderlin（一七七〇～一八四三）を、アウテンリート教授 J. H. F.

Autenrieth（一七七二～一八三五）の指導下で診療した時期があり、また彼の多くの賓客に愛されたワインスベルグの家の心霊（幽霊）塔 Geisterturm には、後に精神病に陥ったハンガリー出身の厭世の抒情詩人レーナウ N. Lenau（一八〇二～一八五〇）がしばしば滞在（一八三一年以降）して奇行を行ったが、発病（一八四四）後もケルナーはヴィネンデン Winnenden 精神病院に彼を訪ねて世話を見た。㈣一八二四年（三八歳）に「二人の夢遊病者の物語と魔術的医学と心理学の領域での体験記 Geschichte zweyer Somnambülen」を発表した頃からテュービンゲン大学のエッシェンマイヤー教授 K. A. v. Eschenmayer（一七六八～一八五二）と共にスピリティズムの研究を始め、二年間自宅に引き取って治療した「プレヴォールストの女透視者 Die Seherin von Prevorst」についての膨大な臨床観察記録（一八二九）を著して一大センセイションを引き起こした後も、最初のパラ心理学の雑誌と目される「プレヴォールスト通信 Blätter aus Prevorst」（一八三一～三九）、「魔術文庫：心霊学と動物磁気的並びに魔術的生活の領域での観察事実文庫 Magikon」（一八四〇～五三）を次々に編集刊行する傍ら、「最近の憑依者の物語：悪霊・動物磁気現象の領域における事実 Geschichten Besessener neuerer Zeit」（一八三四）、「オルラッハの娘の物語 Geschichte des Mädchens aus Orlach」（一八三四）、「自然の夜の領域の一事実 Eine Erscheinung aus dem Nachtgebiete der Natur」（一八三六）など、精神医学と心霊学の境界領域の著作を発表した。㈤彼が趣味として愛好した口太鼓 Maultrommel という楽器を、患者に落ち着きを与えるために聞かせたという事実は、精神病者の音楽療法のはしりと考えられぬこともない。㈥晩年視力が弱って著作が困難になり、最愛の妻に先立たれて抑鬱傾向を示したころ、自らを慰めるために、当時の子供の遊びであったインクしみ遊びに興じ、これに自分の印象をダンテの神曲・地獄編に従って韻文で書き加えた「クレクソグラフィ Klecksographien」（没後刊行：一八九〇）は、今世紀になってロールシャッハ H. Rorschach（一八八四～一九二二）が心理投影テストを考案した時のアイデアの一つとなった。

このうち、「クレクソグラフィ」をめぐる問題については、欧米では既に F. Baumgartner-Tramer（一九四三）を始め

数多く研究があって、殊に H. Ellenberger がロールシャッハ伝（一九五四）を著して以来精神科医の間では広く知られるようになっており、我が国でも Ellenberger が来日（一九七九）して「ユスティヌス・ケルナーからヘルマン・ロールシャッハへ」と題する講演（中井 & Ellenberger: ロールシャッハ研究、二二：一二五、一九八〇 & 二三：一、一九八一）を行い、原典のレクラム文庫版（一九八一）が入手可能となったという事情も手伝って、各方面で紹介されている（例えば西丸：みすず、二九一：九、一九八五、小俣：日本医史学雑誌、三二：一八六、一九八六）。これに対して、ある意味ではケルナーの代表作ともいうべき「プレヴォールストの女透視者」については、彼女が精神病者であったか否か、ケルナーの治療的接近の性質などの問題をめぐって、欧米では既に一九世紀以来数々の解釈と見解が提出されているにも拘らず、今日に至るまでなお様々の異論もあって決着がついていない。我が国では無論、邦訳された Ellenberger の大著 "The Discovery of the Unconscious……The History of Dynamic Psychiatry"（一九七〇：木村・中井監訳、一九八〇）によって概略が紹介されている以外、筆者の知る限りでは、殆ど言及されてもいないようであるので、今回はこの「力動的精神医学の領域において一人の患者に捧げられた最初のモノグラフ」（Ellenberger）を手掛かりとして、精神医学史においてケルナーが果たした役割を若干論じ、かつロマン派医学の一側面に光を当ててみたいと考える訳である。

（京都大学精神神経科）